#### 九州大学学術情報リポジトリ Kyushu University Institutional Repository

#### 王陽明の「心中の賊を破るは難し」について

**裴,健** 九州大学大学院

https://doi.org/10.15017/18146

出版情報:中国哲学論集. 20, pp. 47-61, 1994-10-10. 九州大学中国哲学研究会

バージョン: 権利関係:

# 王陽明の「心中の賊を破るは難し」について

裴

健

### はじめに

王陽明はその門人薛尚謙に宛てた書簡の中で次のように言っている。

何ぞ異となすに足らん。もし諸賢心腹の寇を掃蕩して、以て廓清平定の功を収めば、此れ誠に大丈夫万世の偉績 即日已に竜南に抵り、明日巣に入る。四路の兵、皆な已に期のごとく並び進む。賊必ず破るの勢あり。某向に横 ならん』と。数日来諒に已に必勝の策を得たり。捷奏期あらん。何の喜びかこれに如かん。(『王文成公全書』 水に在り、曽て書を仕徳に寄せて云う、『山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難し。区々鼠竊を剪除する、

巻四、以下『全書』と略称する)

場での大悟で、良知心学はその基礎を構築してから、正徳十六年、五十歳の頃に致良知説を提唱するまで、 していたこと及びその困難さを深く自覚していたことが判る。周知のように、正徳三年、王陽明が三十七歳の時、竜 王陽明が二つの書翰で「心中の賊を破るは難し」と強調していることから、王陽明は「心中の賊」を破ることを重視 王陽明は「山中の賊」を破ることを目的としていただけではなく、「心中の賊」を破ることをも目的としていた。第 県横水の農民暴動を鎮定した時のことである。この書翰から、次の三つの点を明らかにすることができる。第一に、 ものである。その書翰の中に「某向に横水に在り、曽て書を仕徳に寄す」とあるのは、正徳十二年十月、江西省崇義 この書簡は王陽明が正徳十三年(一五一八)、四十七歳の時、江西省信豊県竜南の農民暴動を鎮定した際に送った 所謂「難し」という結論は長期にわたる「心中の賊」を破る活動の中から引き出されたものである。 第三に、

考察していきたいと思う。 どうかは「心中の賊を破る」ことができるかどうかによるのである。したがって、「心中の賊を破る」ことは致良知 とは即ち良知を致すことであり、良知を致すことは即ち「心中の賊を破る」ことである。良知を致すことができるか 陽明は『朱子晩年定論』、 の日常活動とその学術思想との関係を理解するためにも意味のあることだと思われる。本稿ではこの問題をめぐって の鍵であると考えられる。「心中の賊を破るは難し」についての思想を検討することは、 の賊」を破る重要な手段としていたと考えられる。「心中の賊」は良知の対立物であるので、「心中の賊を破る」こ 時期に提出されたもので、陽明の思想形成上に重要な位置を占めていると考えられる。この思想を提出した前後、王 中より得来る」のである。「心中の賊を破るは難し」についての思想は王陽明が四十七歳、致良知説の成熟しかける を経たのである。この間に、 『古本大学』を刊行し、また『象山文集』に序文を寄せている。これらは明らかに「心中 寧王の乱を含めて、「山中の賊」を軽易に鎮定したが、良知の説においては「百死千難 致良知の功夫論及び王陽明

## 、「心中の賊」とは何か

「賊」は明らかに人々の心の中に潜む邪悪なものと言えよう。では王陽明にとって善と悪を判別する標準は何であろ 「賊」とは何であるか。以下、王陽明の所謂「心中の賊」を主として二つの点から捉えてみることにする。 第一に、私欲の問題が挙げられる。 勿論「良知」の二字しかあるまい。彼は良知は即ち天理であると認めているので、良知に合致しているものは であり、人々が「良知」を致すことを妨げるものは「悪」すなわち「心中の賊」である。では、良知にとって、 例の所謂 「山中の賊」は山の中に隠れる「悪い人」、すなわち「反乱者」であるが、人々の心の中 周知のように王陽明は心即理説を主張しており、次のように述べている。

(『伝習録』上)

心は即ち理なり。

良知の人心に在るは、聖愚を間つることなし、天下古今の同じき所なり。心の虚霊明覚は即ち所謂本然の良知なり。(同上) (『伝習録』下)

善を為すことあり、不善を為すことありや」(『伝習録』上)ということであり、また、なぜ「良知を致すの上にあっ 持っているのである。であれば、こういう問題が出て来る。つまり「人皆この心あり、心は即ち理なり、 王陽明の思考に従えば、心は即ち理であり、天理は即ち良知であり、人心に在る良知は、聖人でも常人でも等しく 何を以てか

一番の功夫を用いざること能はざ」(『全書』巻五)るのか、ということである。

私に勝ち理に復るべし」(『伝習録』上)と解釈したのである。したがって、王陽明は人心の本体を失わせる原因こ 勝げて用ふべからざるなり。然れども常人に在りては私意の障碍なきこと能わず、所以に須く致知格物の功を用 に知ることを会す …… もし良知の発にして、更に私意の障碍なければ、すなはち所謂その惻隠の心を充たせば、仁 このような問題に対して、王陽明は「悪人の心は、その本体を失うなり」、「知はこれ心の本体にして、

思雑慮することを指しているのである。 では、王陽明の所謂「私欲」とは何であるか。陽明学の中で「欲」、 等は同じ意味を持っている概念であり、 即ち色を好み、貨を好み、 「私欲」、「私心」、「私意」、「物欲」、「人 名を好むことと七情の過不及すること及び間

私欲の障蔽であると考えている。

なっているのであるか。勿論、その間にずれがあるのである。 では、王陽明も、朱子も、「天理を存し、人欲を去る」を口にしていたが、その意味あいが等しいのであるか、 異

間がこの形(肉体)なるものを持っている限り、誰でも気・形の原理にもとづく「人心」というものが存在しないと がって、是非の道を誤り、私欲功利をほしいままにして、天理が滅びると考えている。このように朱子の考え方によ はただ至善の吾心にあるを知らずして、その私智を用ひて以てこれを外に求む」(『全書』巻七「親民堂記」)、した らずして、天下の人その私智を用ひて以て相い比軋す」(『伝習録』中)と考えている。具体的に言えば、即ち「人 いうことはあり得ないと考えている。彼は「人、是の形を有せざる莫し、故に上智と雖も、人心無きこと能はず」 (中庸章句序)と述べているが、王陽明は心即理の立場から出発して、人欲を生ずる原因は「後世良知の学明らかな まず、人欲を生ずる原因について、両者の考え方は異なっているのである。朱子は性即理の立場から出発して、人

ると人欲は人の生まれつきのもので、聖人であっても存在しないことはないが、王陽明の考え方によると、「人欲は

碍なきこと能は」ざるものである。

たらしめ、而して人心毎に命を聴く」(中庸章句序)と主張している。しかし、王陽明の立場から見ると、朱子の考 え方に従えば、人欲を去ることが徹底できない。それで、王陽明は「天理と人欲とは並び立たず。安んぞ天理、主と というものがあるかないかではなく、多少の区別があるだけである。それで、朱子は「必ず道心をして常に一身の主 無し」、「人欲の中に自ら天理有り」(『朱子語類』巻十三)と考えている。これによれば聖人と常人との区別は人欲 なりて、人欲また従いて命を聴くことあらんや」(『伝習録』上)と批判したのである。 次に、天理と人欲との関係についても両者の考え方は異なっているのである。朱子は「天理人欲は、 硬定するの界

このように王陽明の所謂「人欲」は、朱子の所謂「人欲」と意味が違っているのである。では、 良知と私欲との関

係はどうであるか、王陽明は次のように述べている。

若し物欲の牽蔽あることなくして、但だ良知の発用流行に循って去けば、 常人にあっては多く物欲の牽蔽のために、良知に循い得ること能はず。 (『伝習録』上) 即ちこれ道にあらざること無し。

と考えている。従って良知にとって「心中の賊」は、まず私欲を指すと考えられる。 つまり、王陽明は心の本体を恢復するために私欲の障碍を排除すべく、心の良知を充塞流行させなければならない

るが、ただ私欲が障蔽するために人心の本体を失うのであり、「人欲を去り、天理を存する」ことに功夫を用いれば、 第二に、人間の胸中に纏いつく旧説旧習が挙げられる。そもそも、王陽明の思想によれば、 良知は人人具足してい

即ちその良知を致すことができる。

述べたように、王陽明は「良知の学明らかなら」ざるためと考えているが、では、どういうわけで、良知の学は明ら かにならないのであるか。言い換えればなぜ世人は良知説を受け入れることが難しいか。王陽明は次のように述べて しかし、人欲を去らせようとすれば、人欲を生ずる原因を除かなければならない。人欲を生ずる原因はすでに前

是非の心は、 人皆これあり、 彼はそれ但だ積習に蔽はる、 故に吾が説において卒に未だ解し易からず。 (『伝習

録上

此の学、世に明らかならざること久し、而して旧聞旧習、 障蔽纏繞すれば、一旦驟に吾が説を聞くのみにては

だ非詆疑議せざるものあらず。(『全書』巻四)

つまり、王陽明は、良知は誰でもがあるが、旧説旧習が人を溺れさせるために、 人々は既に形成されている思考様

式に慣れていて、良知の学において、すぐに理解できないと考えている。

に纏りて、尚ほ未だ脱然たらざるものあり」(『伝習録』上)と述べている。 王陽明の門人徐愛でさえも、「先生のかくのごときの説を聞いて、愛、已に省悟する処あるを覚ゆ。 但だ旧説胸中

であると考えられる。王陽明はその説は「独り朱子の説に於いて相抵悟するあり」(朱子晩年定論序)と述べている。 ると考えている。では、王陽明の所謂「旧説旧習」は主として何を指すのであろうか。所謂「朱子の中年未定の説」 明らかに、王陽明は、 世人が良知説を受け入れにくいのは、世人の胸中にまとわりついている旧説旧習のせいであ

王陽明は三十七歳で竜場において「格物致知の旨を大悟した」後、朱子の格物説と異なる見解を示した。 彼は、

朱子の所謂格物と云うものは「物に即いてその理を窮むる」に在り …… 鄙人の所謂致知格物のごときは、吾が 心の良知を事々物々に致すなり」(『伝習録』中)

と言っている。それから、王陽明の講学はほとんど朱子学を批判する口調を取ったと言えよう。 『伝習録』だけを見

良知の新説を人々に受け入れさせることができない。したがって王陽明の所謂「旧説旧習」はまず朱子学を指してい と全面的に対立しているのである。 ても、朱子を引用したのは全部で二十個所であるが、「天理の極を尽くして、一毫の人欲の私無し」のほかは、朱子 両者の立場は異なるから、朱子学の影響を人々の心から除かなければ、陽明の致

このように王陽明は、人々が良知を致すことができない原因を次のようにまとめている。

ると考えられる。

君子の学は、 以てその心を明にす。その心は本味きことなし、而るに欲これが蔽を為し、習これが害を為す。 故

その門人王龍渓も次のように言っている。に蔽と害とを去けば明復す。(『全書』巻七)

ば、それ萬物の感に於いて当体具足し、虚中りて善応ず。(『王龍渓全集』巻二「宛陵會語」) 学ぶ者、苟に能く旧聞に泥まず、務めて実に其の良知を致し、物欲の間てを去り、以て其の虚体に復るを求むれ

明らかに、王門は「旧聞」と「物欲」とを良知を致すことを妨げる二つの障蔽としているのであり、 つまり、

## 二、「心中の賊を破る」とは何か

である。

していたが、儒者としての王陽明は常に「心中の賊」を破ることを問題としていたと言える。 知のように、王陽明は将領と儒者を一身に兼ねていた。将領としての王陽明は「山中の賊」 を破ることを任務と

邪説を息んずることである ことは明らかに人々の心中の私欲と胸中に纏いついている旧説旧習を除くことである。言い換えれば、 「山中の賊を破る」ことは即ち「兵を調して剿殺す」と「斬首を行う」ということであるが、 「心中の賊を破る」 人心を正し、

では、王陽明はどのような方法で、人心を正し、邪説を息んじて、心中の賊を破ろうと考えているのであるか。

安んじ、相い養いて、その自私自利の蔽を去り、讒妬勝忿の習を一洗して、以て大同を済さしむ」(同上)ことを求 いら状況に対して、「良知の学を天下に明らかにし、天下の人をして皆な自らその良知を致すことを知り、 と為さず」(『伝習録』中)、「後世良知の学明らかならずして、天下の人その私智を用いて相い比軋す」(同上) と 王陽明は「聖学晦くして邪説 横 なり、教うる者は復たこれを以て教と為さず、而して学ぶ者も復たこれを以て学(1) 私欲については、「聖学」を宏揚することを通じて、私に勝ち理に復す。 「聖学」を宏揚することを以て己の任と為し、生涯講学して、止むことがなかった。彼は次のように言ってい 以て相い

の益あるなし。 君子の学は、同志の友、日に相い規切するにあらざれば、すなはち亦た以て悠々と日を度り易くして、 山中の友朋、 亦た此の学を以て日に相い講求する者ありや。 孔子云ら「徳の修めざる、 学の講ぜ 激励警発

ざる、これ吾が憂いなり」と。而るを況んや、吾が侪においてをや。(『全書』巻四「与陳国英」)

吾、亦た未だかつて之を拒まざるなり。(同上巻二十六)

書を読み、学を講ずるは、此れ最も吾が宿好する所なり。

今干戈擾攘の中と雖も、

四方より来学する者あれば、

彼は各地の叛乱や暴動を征討する際にあっても、弟子たちに学を講ずることを忘れなかった。年譜にも「先生、 賊

壘に出入し、未だ寧居するに暇あらず、門人 …… 皆講聚して散ぜず。」(『年譜』正徳十三年七月)とある。

その弟子銭徳洪も言っている。 陋を一洗する」に務めていた。臨終の際も門人に「近来、進学如何」(『年譜』嘉靖七年二月)と尋ねている。 彼は至る所によく「郷約」を立てたり、学校を興したり、「書院」を創ったりして、「聖賢の学を興起して習染の

平生、天下の非詆を冒し、万死一生を推陥し、遑々然として講学を忘れず。惟だ吾人斯道を聞かずして、 智に流れ、以て日に夷狄禽獣に堕ちて覚らざることを恐るるなり。(『伝習録』序) 功利機

り「聖学」を宏揚する面に投じたのである。 彼は「教化」を通じて「その心体の同然」に復らせることを信じていて、一生の大部分の精力を教育、

(2) 旧説旧習については、朱子学批判を通じて、習俗の害を去る。

は非常に困難であった。そのため、 主導的地位を持っていて、朱子学的な考え方は世の通念となっていたので、陽明が世人に自分の新説を理解させるの 知の学を天下に明らかにする障害は何であるか。明らかに前に述べたように朱子学である。朱子学は当時の思想界で れない原因である。旧説旧習を批判せず、邪説を止めさせなければ、「聖学」を宏揚することができない。 前に述べたように、王陽明の思考によれば旧説旧習は人々の私欲の生ずる原因であるし、 陽明の旧説旧習に対する批判は朱子学を攻めることから始まったのである。三つ 人々は良知の説を受け入 では、良

となることがあっても、それが世の朱子学者の怒りをかい、 ①朱の言を借りて、 前に述べたように、 朱子学万能の時代にあっては、朱子学に対しては、針鋒相対の批判ではなく批判がまし 以て朱を攻める。

彼等から非難されることも激しかった。それで王陽明は

の点から見ていきたい。

集めて定論と為し …… これを表章し、一辞も加へず、褊心ありと雖も、将にその怒りを施す所なからん」(『年譜』 その非難の鋒を避け、 未定の説を守りて、復たその晩歳既に悟るの論を求むるを知らず」(朱子晩年定論序)、 彼等の口を封ずるために、 『朱子晩年定論』を著わした。彼は「世の学者、 「朱子の晩年悔悟の説を取り、 徒らに朱子の中年

が出版されたのは朱子学への大きな衝撃であったことは間違いない。 勿論、『朱子晩年定論』の是非についてはその後の百五十年の間論争が止むことがなかったが、 当時この

②「古本」を借りて、「新本」を攻める

正徳十三年)と述べている。

間違いないであろう。 版した。勿論、古本大学の出版はいろいろな議論と非難を招いたが、朱子学の権威地位をある程度揺るがしたことは ないので、朱子の新本の誤りを正して『古本大学』の正当性を論じ、かつその本文のわきに傍釈をつけて、これを出 考によれば、古本の方が文意も明白で、工夫実践の上からも易簡で入り易い。朱子のように何ら改正補輯する必要が 所謂「古本大学」は即ち『礼記』所収のものを指し、「新本大学」は即ち朱子が改正したものを指す。 明 0)

賊を破る」こととの関係が明らかであろう。 『古本大学』と『朱子晩年定論』の刊行は「心中の賊」 の書簡を出した後、 同じ年の大きな行動であり、 「心中の

③陸を揚げて、以て朱を抑える。

明が四十歳の時のことであった。寧王の乱を平定して、良知学も熟して来ていて、以前のように当時の朱子学者に遠 したのである。だが、最初は陸学に加担するわけではなく、陸学も考えてほしいというに過ぎなかった。 慮する必要がなくなってきていたので、 ない。したがって、彼は「天下の譏りを冒し、以て象山のために一たびその説を暴はさん」(『年譜』正徳六年)と欲 なる考え方を持っていて、陸学と相い通じる。故に陸学が世の人々に重んじられないということは、王陽明には忍び 衰退し、朱子学が盛んになっていた。明になると、朱子学が官学として一層重視せられた。しかし王陽明は朱子と異 朱子と陸象山とは南宋思想界の双璧と言われているが、その哲学観点は異なっている。ところが、宋末以来陸学が 陽明は『象山文集』の重刻に際し、序を著して以てこれを表彰した。 これは王陽

陸学を称誉した。 亜流の欠点を指摘し彼等の陸学非難を痛烈に駁論し、聖賢の学が心学であり、陸学はそれを伝えたものであると述べ、 これは王陽明が四十九歳の時のことであった。

以上のことは、朱子学に対して批判する際の重要な手段であったと考えられる。それで『明史』は次のように言っ

ている。

は翕然として之に従ふ、世に遂に「陽明学」ありと云う。(『明史』巻一百九十五「王守仁」) 以て孟氏の伝に接することあり、而るに朱子『集注』、『或問』の類は乃ち中年未定の説なり」と謂う。学ぶ者 (王陽明) 教を為すに、専ら致良知を持て主と為す。 「宋の周、程二子の後、 惟だ象山陸氏のみ簡易直捷にして、

## 三、「心中の賊を破る」は、なぜ「難し」か

はどういう点にあるのであろうか。 を取り除くことは易しいが、人々の思想を変えることは難しいと痛感した。では、「心中の賊」を破ることの難き所 を奪らべきなり、匹夫も志を奪らべからざるなり」を深知するわけである。彼は長期的な実践によって、「山中の賊 を破る時に心を攻めることによって、勝利を取った例が乏しくないが、儒者としての王陽明は論語の所謂「三軍も帥

将領としての王陽明は兵法に所謂「三軍も気を奪うべく、将軍も心を奪うべし」を深く知っていて、「山中の賊」

①己私に克つは難し。

難しい。王陽明の友人はこういうふうに言っている。 従って、人心を正すことは、外からの強制力によって悪をはらい除くことではなく、説得、教育によって、 はそうではない。「心中の賊」を破ることは、自分については「克己」と言い、人については「人心を正す」と言う。 所謂「山中の賊」を破るには、兵を調して剿殺しても、これをはらい除くことができるが、「心中の賊」に対して 理に復って、「掃除廓清」するという目的に至るのである。しかし、ひとりびとりにとって己に克つことも

私意萌す時、 分明に自心に知得するも、只だこれ他をしてすなはち去らしむること能はず。(『伝習録』上)

のように言っている。 実は王陽明自身でも、 「己私克ち難し」と感じている。しかも、このことから門人たちのために心配した。 彼は次

毎に己私の克ち難きに因りて、輒ち諸友のために憂慮すること一番。(『全書』巻四「与黄宗賢」)

ない。彼の言で言えば一これ各人にあり、願望し得べきにあらず(同上)ということである。したがって、王陽明は 「人に学を為すを教ふるは、一偏を執るべからず …… 須く他をして省察克治せしむべし」(『伝習録』上)と言って 王陽明の観点によれば、己私に克つことは全く各人の省察克治の功によるのであって、他人の願望によるものでは

になった。これに対して王陽明は「力量の範囲内において導き励ますことがなによりも大切である」(『全書』巻四 陽明の門人たちの中に、後進を感情のおもむくままに指導しようとした人がいたが、反って仇敵視されること

「与楊仕鳴」)と説いた。

己私に克つことの難しさは明らかであろう。 知らざる者あり、力を用いて、之を察すると雖も、尚た見ること、易きにはあらず」(『伝習録』上)と。よって、 もら一つは「天理人欲、其の精微を必ず時々に力を用いて省察克治す、 方に日に漸く見るあり ……

②邪説を息んずるは難し。

書』巻六「寄鄒謙之」)と言っている。 く難しい。王陽明はこれを熟知していたので、邪説を息んずることを「亦た草率として能くすべきにあらず」(『全 非常に難しい。逆に、一つの思想と学説は一旦人々に受けいれられると、これを人々の中から取り除くことは、 一つの新しい思想を伝播させること及び人々に受け入れさせることは、旧思想と旧学説からの反発があるはずで、

邪説を息んずることは、人心を正すことと同じく、 強制的な方法ではいけなくて、教育、 説得によるしかできない。

当時の浙江省嘉興県の長官李道夫は、陽明学を信奉し、性急かつ強制的な方法で陽明学を以て政教としようとした。 失敗の恐れがあるから、王陽明は李道夫に手紙を寄せて、「力を為すこと易く、効を収むること溥し」(『全書』巻 「寄李道夫」)無理をしないで順序を追って導くようにと譬えを引きながら説いている。

其の難きを見るなり」(『王龍渓全集』巻二「水西同志會籍」)と言っている。 茲に於いてす」、「吾人千百年の後に生まれ、千百年の陋習を一洗せんと欲せば、以て上、絶学の伝を窺うも、亦た すべからず」(『全書』巻三十二)と痛感した。その門人王龍渓も「功利の毒、漸々人の心髄に入ること千百年より 集序」)。したがって、王陽明は「聖人の学は、明かにし難くして惑ひ易し、習俗の降ること、愈々下くして益々回 し、旧習を便として、己が見を是とするより起る。故に勝心旧習の患たる、賢者も免れず」(『全書』巻七「象山文 入ることの深き、論弁を容さざるものあり」(『年譜』正徳六年正月)、しかも「それ是非同異は、毎に人の勝心を持 前に述べたように、陽明学の論敵は朱子学であるが、「晦菴の学は天下の人、童よりしてこれを習う、既已に人に前に述べたように、陽明学の論敵は朱子学であるが、「晦菴の学は天下の人、童よりしてこれを習り、既已に

## 四、「心中の賊を破る」は可能か

皆な堯舜となることができ、皆な聖賢となることができるのである。 王陽明は「心中の賊を破る」ことは「難し」とは言うものの、不可能とは説いていない。「心中の賊」を破る過程 良知を致す功夫である。良知を致すことは「明白簡易」であり、誰でもができることである。したがって人人

良知は人人自ら有す。

ろらか。王陽明の思考によると、その理由は良知は人人自ら有する所にあるのである。彼は次のように述べている。 致良知の学はなぜ「明白簡易」と言われ、なぜ誰でもができると言われるのであろうか。その理論的根拠は何であ 某近来却って良知の両字を見得すること日に益々真切簡易なり。朝夕朋輩と講習するも、只だこれこの両字を発 揮し出でず、この両字は人人自ら有する所に縁るが故に至愚下品と雖も、一たび提すれば便ち省覚す。

巻六「寄鄒謙之」

えんのものは、これを以てなり」(『全書』巻八「書魏師孟巻」)と述べている。つまり人みな堯となることができる 理由は、聖愚の別なく、誰でもが良知を持っていることである。 とができれば、聖人となれる。それで王陽明は「これ良知、聖愚に同じく具りて、人皆以て堯舜となるべしとなすゆ に、これらの区別があるのである。しかし、愚不肖でも良知は先天的に備わっているのであるから、これを尽くすこ つまり、

敍説」)、「ただこれ致良知の三字は尤も簡易明白、実に手を下す処ある」(『全書』巻六「与陳惟濬」)のである。 して尤も暁り易しと為さしむ」(「答季明徳」)、「本体を直指して、学者をして言下に悟ることあらしむ」(「刻文録 なぜ「致良知の三字を単提する」(『全書』旧序「刻文録敍説」)のであろうか。その理由は「良知を言へば即ち人を その「立言宗旨」をまとめて「善なく悪なきはこれ心の体、善あり悪あるはこれ意の動、善を知り悪を知るはこれ良 のであり、これを「至善」と言う。そして「善はすなはち良知なり」(『全書』巻六「答季明徳」)。では、王陽明は 知、善を為し悪を去るはこれ格物」(『伝習録』下)の「四句教」とした。人心の本体はもともと善もなく悪もな そもそも、王陽明が致良知説を提唱する目的は、人々に「善を為し、悪を去る」ことをさせるためであるが、

ち天理を識らん」(『伝習録』上)と述べている。したがって、「吾が輩の功を用ふる、只だ日に減ずることを求め て、日に増すことを求めず、一分の人欲を減じ得ば、便ちこれ一分の天理を復し得るなり」(『伝習録』上) このように、私欲を克服することこそ、良知を致すことの手を下すところである。 では、良知を致すためにまず手を下す処は何であろうか。王陽明は「良知は即ち天理なり」「人欲を去り得ば、便

王陽明は朱子学のように文義の上に工夫をして、実に行わないやり方に反対し、次のように述べている。 今、吾が所謂格物の学を為すもの、尚ほ多くは口耳に流る …… 只管に天理を講じ来たりて、頓放し着して循は

ず、人欲を講じ来たりて、頓放し着して去らず。豈に格物致知の学ならんや。(『伝習録』上) 人もし真実に已に切に功を用ひて已まずんば、すなはちこの心において天理の精徴は日に一日よりも見え、

王陽明の考え方によれば、何を天理と為し何を人欲と為すかを口だけで論辯するのは意味がない。人は必ず已に知っ ち、私の克つべきものなきを待ちて、方に尽く知ること能はざるを愁へよ、亦た未だ遅からず。(『伝習録』上) て去らず、且つ只管に尽く知ること能はざるを愁へて、只管に閑講するも、何の益かこれあらん。且く自己に克 の細徴も亦た日に一日よりも見えん。もし克己の工夫を用ひずんば、終日只だこれ説話するのみにして、 人欲も亦た終に自ら見ず……今の人、己に知るの天理において肯て存せず、已に知るの人欲も肯

に一日より明らかになるわけである。従って、良知を致すためには私意を克去せねばならない。 只だ須く私意を克去すべく、便ち是ならん、また其の理と欲との明かならざることを愁へん(『伝習録』上)

ている人欲を去ることから、工夫をしなければならない。こうすれば、何を天理と為し、何を人欲と為すかは自ら日

めることができても、近づくことができないものとなる。陽明学の方は、「日に増すことを求めず」、「只だ日に減 えることを求め、今日は一物に格って明日も一物に格ることによって、「支離繁難」となり、人々にとって聖賢は眺 このように、王陽明の「聖と作るの功」は朱子学の「聖と作るの功」と相反している。朱子学の方は知識の日に増

ずることを求むるのみ」、「人欲を減じ得ば、即ち聖賢になるべし」。良知の学こそ、このように「軽快脱洒」、この

ように「簡易明白」であり、「凡そ門墻に在る者、辞説を煩わさずして、本体を指見すること、真に日月の天に麗

愚不肖と雖も、一たびこの体に触れて真知せば、皆な堯舜たるべし」(「刻文録敍説」)。 がごとし、大地山河、万象の森列、陰崖の鬼魅、皆な化して精光となり、断渓の曲径、皆な坦として大道となる。至

したがって、「良知は人人自ら有する所」ということこそ「心中の賊」を破る根拠なのである。

天地万物を以て一体と為す。

この一体の心は、聖人愚人の別なく、何人も本来もっているものである。故に民の困苦を見れば、吾が身の疾痛と同 即ち、「人は天地の心にして、天地万物は本吾が一体なるもの」(『伝習録』中「答聶文蔚」)という道理が分からな 皆な以てその私に克ちて、その蔽を去り、以てその心体の同然に復ることあらしむ」(『伝習録』中「答顧東橋書」)。 いので、始めて「有我の私」が出て来る。したがって「その天地万物一体の仁を推して以て天下に教へ、これをして 前に述べたように、人はなぜ私心があるのか、良知の学が天下に明らかにならないからである。具体的に言えば、

じく心に痛みを感ずる。これが良知であって、この良知を致すことに務めるならば、「天下の人を視ること内外遠近 凡そ血肉あるもの皆その昆弟赤子の親のごとく、安全してこれを教養す」(同上)。是非を公にし好悪を同じ

を発し、人をして各々本性を求め、良知を致し極めて以て至善に止まらしむ」(『年譜』嘉靖三年正月)。嘉靖四年、 王陽明が五十四歳の時、有名な「抜本塞源の論」を公表し、万物一体の思想を痛論した。嘉靖六年、つまり、亡くな 年譜によると、嘉靖三年、王陽明は五十三歳、越にあって学を講じた時、「ただ大学の、万物、体を同じくするの旨 という理論を重視した。良知の本体は即ち「天地万物一体の仁」であり、良知を致す根本的な問題はその心体の同然 体の仁を立つ」ことである。そこで、王陽明は致良知説を掲げてから、特にその晩年、「天地万物を以て一体となす」 うし、人を視ても己のように、国を視ても家のようになり、天下を一家とし、中国を一人とするようになる。 る一年前、征途中の王陽明は南浦についた。その翌日、明倫堂で『大学』の講義を行った。 に復ることであると考えている。それで、この時期、王陽明が講学した中心内容は、「天地万物一体」の論である。 したがって、王陽明の考え方によれば、私欲を除き、「心中の賊」を破るために一番大切なことは、「天地天物一

ざるはなし。吾の兄に親しみて以て人の兄に及ぼせば、すなはち天下の兄弟親しまざるはなし。君臣や、夫婦や、 は、良知を致すことである。そうであれば、「吾の父に親しみて以て人の父に及ぼせば、すなはち天下の父子親しま このように、明徳、親民、至善を説く『大学』は大人の学で、大人とは天地万物を以て一体と為すものであること、 至善に止まることは、 友や、推して鳥獣草木に至るまで、すなはち皆な以てこれに親しむことあり」(『全書』巻七「親民堂記」)と。 すなわち人己を一体とし、天下の民の苦しみを見ること、己れの身の疾痛と感ずるような万物一体の心を尽くすこと 民に親しむことにあり、明徳親民の極則は即ち所謂至善である。至善は即ち明徳の本体であり、いわゆる良知である。 「大学問」)と『大学』を解釈したのである。王陽明の思考によれば、明徳を明らかにすること、民に親しむこと、 王陽明は、『大学』とは、大人の学であり、「大人は天地万物を以て一体と為すものなり」(『全書』巻二十六 『大学』の三つの綱領であるが、この三者は不可分のものである。明徳を明らかにすることは

点にあることにある。

従って、王陽明の思想において、人欲を去り、天理を存する根本的な問題は、人々が「天地万物を以て一体と為す」

万物一体の立場に立つことによって、人々は自ら天下を以て公と為すことができるのである。

**—** 60

ずる所にあらざるを以てなり」(『伝習録』中)。 致良知の学は「知り易く、従い易し」というのは、 「正に大端は惟だ心体の同然に復るに在って、 知識技能は与り論

#### おわりに

と能はず」、「爾の那の一点の良知は、これ爾が自家底準則なり……実々落々に他に依着して做し去かば、善は便ち『全書』巻五「与楊仕鳴」)わけである。そこで、王陽明は「良知の人に在ること、随ひ儞如何すとも、泯滅するこ十分に発揮することができ、それは太陽のようなもので、「一たび太陽が出るとどんなばけものも姿をかくす」( 存し、悪は便ち去らん」、「今日、良知の見在することかくのごとくんば、只だ今日知る所に随つて拡充到底し、明 るはずである。つまり、良知があらわれることである。もし、真に良知を信じきれたならば、良知本来固有の機能を ていると考えられる。 「万物一体」の論は「心中の賊」を破る思想的武器である。したがって、「心中の賊」を破る力は良知自体の中にあ 以上のように、「心中の賊」を破ることは、良知を致すことの鍵であり、致良知説の中に極めて重要な意味を持っ 「良知は人人が自ら有する」という論は、「心中の賊」を破ることができる理論的根拠であり、

習録』下)と述べている。

日良知また開悟するあらば、

便ち明日知る所に従って拡充到底す。かくのごときは方にこれ精一の功夫なり」(『伝